

地 水 師



地理学教室いろいろ

渡辺 光

世の中の事は何でもそうであるが、上を見ればきりが無いが、また下を見てときりが無い。まあ自分の置かれている現在の状態を一応容認して、その環境を最大限に善用するより外に、現実的の最良の道はあるまい。

このことは地理学教室についてと云える。ペンク、ブリュックナーなどのいたオーストリアのウィーン大学の地理学教室などは、その広大な研究室、豊富な文献等、流石に長年の伝統に培われただけあつて、ローマは一日にして成らずの感を久しくするに十分なところがある。

同様のことはドエールやアールマンの本拠であるスエーデンのストックホルム大学や、ユールストロームなどのいるウプサラ大学についてもあてはまる。

戦災でいためつけられたドイツやフィンランドの諸大学の地理学教室は、その地理学教室を訪ねて見ると、教授ノ人、助教授ノ人乃至フ人といふところが多い。購入外国雑誌などと、*Geographical Review* がたつた一つころがつていたりする。しかも専攻学生はちやんといるのである。教育の機会均等の原則内で如何となすといひ度い。

私立大学の地理学教室、私立大学のそれは戦前の高等師範部地理学科又は地理歴史学科等から昇格したものが多く、しかし今は法政、立正、明治、立命館等は博士コースまで置いている。このようなところは規準に合わせるために相当の施設をしているが、学生数も多いために、果してどの程度に現実的に学生からの恩恵を蒙っているかは疑問である。

騰つて本学の地理学教室は、以上のどの辺にあたるであろうか。これは自分自身のことになり過ぎるから、あまり客観的には判断しかねるが、多くの人の話を総合すると、日本的には相当のところに行つていようである。

施設の点でこそウィーン大学等に見られる重厚性は認められないが、古い地理学の歴史を背景に持つてゐる国々であるだけに、この点が却つて写真測量、判読その他などの新しい施設を取り入れる機会となつたと見る事ができるようである。

アメリカ合衆国の諸大学の地理学教室の施設や、研究費、学生経費等が、ヨーロッパのそれらを上廻るものであることは一般常識であるから、ここは

くどくど述べる必要はあるまい。

翻つて、日本の各大学について見るとどうであろうか。日本では大学の数が著しく多い上に、諸外国にも増して大学間の較差があり過ぎるので、一概には云えない。しかし強いて分類して見ると次の様になるのではなからうか。

1) 官立の大学院大学理科系地理学教室、これに属するものので最も歴史が古く、講座も充実しているものは東京教育大学のそれだ、これについて、東京大学、東北大学等のものがある。都立大学のものも、公立とは云え之に準ずるとのと同様にしてよからう。これらは、多くの問題はあろうが、大体に於て欧米の大学の水準に達しているのではあるまいか。

2) 官立の大学院大学文科系地理学教室、これに属するものとしては、京都、名古屋、広島等の諸大学の地理学教室があげられる。理論的には文科に属するか、理科に属するかによつて、地理の内容に変化があるべきでなく、研究費等に特に不利を蒙ることがあるべきではないが、実情は日本の文科軽視の風潮を反映して、理科系のものに比して遜色のあるのはやむを得ないことである。

3) 官立の文理系乃至教育系諸大学の地理学教室最も問題になるのはこの範疇に入る地理学教室であろう。この種の諸大学は戦前の師範、専門、高等等の諸学校の昇格したものであるが、予算及び定員は殆ど増額されぬままであり、しかも地理は多く社会科学系に入つて居るために、文科系となつており、従つてこの十数年來殆ど改善のあとがない。試みにこの実例の一、二について見ても、パーターマン、レジューアナロス、エコノミックジオグラフィー等は初号から揃つて居るし、都下諸大学の向で古いものでお茶の水に比べればどう仕方がないということが云われている位である。このことは先輩諸先生の御盡力によるものと感謝すると共に、単に本学の至として在任、卒業生の勉学に資するばかりでなく、日本の地理学会のために資したいものである。

どか夏より

心配のような安心な話

表海 重夫



昨年の本誌に「学生時代の思い出」というテーマを与えられて、今更書かずとがなののがい思い出を記したので、今度はよき今の時代の学生諸君諸君の樂しげな生活ぶりを、見たままの印象記にしてノルマを課そうかと考えた。しかし当節の学生生活の実態を語つてわれわれの時代との相違を説明しよ